平成詩漫歩

3「見落とされた「平成詩」の問題――北島（ペイタオ）の詩から――」

中村剛彦

記念日　　北島（ペイタオ）

そしてわれらは深淵に踏み迷った

記念日がひとつ
往時の嵐を痛飲して
われらとともに沈んでゆく

風が鍵穴の中である形となる
それは死者の記憶
夜の知りえたもの

「平成」という時代が、1989年1月8日からはじまったことと、同年11月9日にベルリンの壁崩壊が起きたことの因果については少し前に触れたが、同年の6月に起きた中国民主化運動を共産党政権が弾圧した「天安門事件」は、さらにその因果の深さをもの語っている。事件の名を正確にいえば「六四天安門事件」である（これは1976年4月5日に起きた「四五天安門事件」との区別であるが、その詳細はwikipedia等を参照されたい）。

「平成」が、20世紀の世界を分断した東西冷戦秩序の崩壊とともにはじまったことの偶然を問うことは、論を進めながらゆっくりと考えなければならないだろうが、あれから30年以上が経ったいま、その歴史の偶然が、振り返ってみれば私たちの精神の必然の因子となっていることを痛感する。あらゆる事象はつねに連鎖し、時間の連続性のなかに生起しているのだから[1]。たとえば「明治」「大

正」「昭和」「平成」「令和」といった、天皇一代に一元号をつける「一世一元の制」がはじまったのが明治維新以降であることはあまり知られていないが、昭和20（1945）年8月の敗戦に至ってもなお消滅しなかったこの慣習は、昭和54（1979）年の元号法成立によって法制化までされている。いわば私たちは天皇という存在の連続性を示す元号にすっぽりと浸かって生きているわけである。とはいえ、この日本人の歴史観念の連続性は、より大きな世界史の観点から見ればかなり特異な民族主義的観念であろう。ある意味で、1989年が「昭和」の終わりで「平成」のはじまりであることは、世界のある国、民族から見れば、ようやく日本は終戦を遂げたと考えられたであろうし、逆にある国、民族からすれば日本は未だ明治から始まった帝国主義体制を温存しているとも考えられたであろう。現在の、特に東アジアにおいて、あの戦争の傷が癒えないままに様々な政治問題が噴出しつづけるのを知るとき、そのような世界から見た近代日本の形姿を見返さないといけないし、本論で「平成詩」を語る際にも、そうした俯瞰的視点を導入しなければ、これまで数回述べたような「昭和／平成」における「温もり／冷たさ」の断絶のみを語るだけではいかにも半端なものに陥ってしまう危険がある。つまり「平成詩」という概念そのものが、明治以来、もっといえば明治維新のスローガンとなった尊王攘夷論が醸成されていた江戸期からの民族主義的歴史観の連続性に裏打ちされているという視点が必要なのである。

そこで、冒頭に挙げた北島（ペイタオ）の「記念日」に触れようと思う。北島はすでに世界的な詩人である。「六四天安門事件」以前から、地下雑誌「今天」を主宰し、中国における民主化運動を牽引し、中国共産党による弾圧から逃れて亡命詩人となった。この詩は亡命後に欧州を放浪中に書かれた詩であるが、「記念日」とは果たして「六四天安門事件」のことを示しているのかどうか、私が持っている『北島詩集』（是永駿編・訳、書肆山田、2009、本稿の詩はここから引いている）では特に示されていないのでわからない。しかし、そのようにして読まずとも、この「記念日」が、私たち日本人にとっての「平成」のはじまりの「記念日」として捉え直してみることで、見えてくるものがある。つまりあの「六四天安門事件」の日が、私たち西側陣営の人間が自明の理としてきた民主主義が敗北した「記念日」であるということである。この詩は一読して絶望感に包まれた暗澹たる詩であるが、思えば「六四天安門事件」が起きた平成元年以来、西側諸国においても、グローバル資本主義の広がりとともに人権が蹂躙される時代、人間ひとりの命より、国家の存亡や企業の存亡を優先する時代が到来した。北島個人にとっての「記念日」は「六四天安門事件」を指すかもしれないが、民主主義陣営に住

まう者にとっても「敗北」の「記念日」であることを示す点でこの詩の持つ今日性はある。言うなればこれまで述べた「平成の冷たさ」とは、共産主義、資本主義のイデオロギーを超えた世界史的な民主主義の「敗北」の共時性をもっていることを北島の詩は伝えてくれる。

ここで個人的な思い出話に転じたい。実は私は北島が来日したときにその朗読を聞きに行っている。今から20年以上前、1998年に「日中国際芸術祭『今天』20周年記念・詩とアートの夕べ」という催しが朝日新聞社主催で浜離宮朝日ホールで開かれた。北島ほか『今天』の詩人たちと、大岡信や谷川俊太郎などの詩人の朗読、そして中国人アーティストによるパフォーマンスであった。私はけっこう前の席に座っていて、大岡信が近くの席で、中国人アーティストのパフォーマンスをその大きな目でじろっと見ていたのを覚えている。そのパフォーマンスは、ランプのついた長いペニスカップを股間につけて客席を練り歩くようなものであった。私は25歳の若造で、中国文化に詳しい友人に誘われて一緒に行ったのであったが、正直にいえば、当時の私は「六四天安門事件」のことや、北島など中国現代詩の知識があまりなく、その会の意義深さがよく理解できていなかったため、内容についてはほとんどちんぷんかんぷんだった。

むしろ感覚として今も覚えていることは、こうした大新聞社主催による「文化交流」的なアート・イベントが、私にはどうも高尚な知識人たちの戯れ事のようにも思え、もっと詩やアートは、アンダーグランドな場所から呻き声のように吹き出すものではないかと疑問に思ったものである。実際に当時、北島ほか『今天』の詩人たちは、そのときも中国共産党に抵抗するアンダーグランドな詩人たちであった。「六四天安門事件」後、ディアスポラとなった詩人たちが、1998年、つまり平成10年の安穏としている日本の東京にやってきて、私のような甘い認識を持って詩らしきものを書いている観客や、安全な地位にしがみついてあぐらをかいている似非知識人たちを前にして、果たして何を感じたであろうか。もしかしたら背筋が凍るほどの孤独感を感じたかもしれない。その意味であの中国人アーティストのパフォーマンスは、すまし顔した日本の「文化交流」そのものへの批判であったとも言える。しかし、いまの日本に比べれば、20年前当時のこの国の方がまだマシであったかもしれない[2]。

あれから20年、中国の経済は日本の経済を凌駕するほどの驚くべき速度で発展し、数年内にはア

メリカを超える規模になると予想されている。同時に昨年からつづく香港の民主化運動弾圧に見られるように、アジア一帯への中国の支配圏は広がりつつある。そうしたなか、多くの日本人が中国脅威論に踊らされ、街頭やネット上で中国政府や中国人へのヘイト活動が行われている。世界的な保守主義の台頭の流れではあろうが、思うに日本人の精神は、いまや他国への憎しみや妬みを持たずにはほとんど自律性を保持できない程に脆弱になってきたとも言える。ヘイトはそれを露呈している。そうこうしているうちに、かつて平成バブルに酔った面影のみをノスタルジックに湛えるだけの、元号のみを自国のアイデンティティのよすがとしているアジアの一小国になるだろう。

もう一つ北島の「記念日」に連なる詩を引こう。

悼む――六・四受難者のために　　北島

生者ではなく死者が
終末の日のような深紅の空の下を
つれだって行く
苦難は苦難をみちびき
恨みの果てにあるのは恨み
泉は涸れ、大火は連綿と燃え
帰りゆく道はさらに遠い

帝王ではなく子供が
鉄かぶとのぶつかりあう
音の中で祈りをささげる
母親が光明を懐胎し
暗黒が母親を懐胎した
石も動き、時は逆に刻まれ
日蝕がすでに現われる

肉体ではなく魂が
毎年同じ誕生日をともにすごすだろう
君たちは同じ年齢をもったのだ
愛が死者のために組織した
永久の連盟
君たちはしっかりと抱き合う
長々と続く死亡者リストの中で

この詩は副題にあるように「六四天安門事件」の受難者、つまり中国政府によって殺された民主化運動家たちへの追悼詩であることが明記されているが、それゆえにこれが民主主義のプロパガンダの詩としても読むこともできる。「平成」時代に、このような詩が亡命者たちによって書かれつづけたことが、「平成」を生きてきた日本人にどれほどのリアリティをもって読まれたであろうか。少なくとも私自身はいまになって読み返し、己の生ぬるい詩意識を恥じるのみである。

それでこのコロナ禍のなか、私自身が職を失い、湘南の辺境の海岸沿いに引っ越したこともあって、比較的近くに住む鎌倉在中の詩人三木卓の『平成その日その日　鎌倉日記Ⅲ 2006―2019』（鎌倉春秋社、2019）を図書館で借りて読んでいると、2008年の北京オリンピック時の章でこう書かれていた。

「今はまだ問題をかかえた国だろうが、発展過程で起っていることをいちいち批判してもしかたがない。中国は開かれた近代国家を目指しているのだから、そのことをわたしは疑わないので、必ずいい国になると思う。偉大な文化を持つ中国が強力な近代経済国家となると、われわれニホンはアジアにおけるナンバーワンの地位をうばいとられるだろうが、侵略されてやせほそるわけではなし、むしろ好景気なら共栄こそできるはずだから。両国はうまくやっていけるはずだし、またそうならなければならない。」（p144-p145）

1935年生まれで、幼少期を大連で過ごし、戦後引き揚げて帰国した三木の文学は、まさに「昭和」の精神を持って書かれてきたといえるし、この「平成」を綴る書の随所にもその精神は漲っている。上記の引用も「昭和」における日本とアジアの関係、特に戦前に日本が侵略した中国や朝鮮など東南アジア諸国に対する、ある世代共通の平和共存への願いが根底にある。私の親が、三木と同世代ということもあり、その思いは身近にも感じて育ってきた。

しかし「平成」という時代には、より深刻な問題を世界は背負ってしまったことを北島の詩は物語っている。先に述べたように、私たちが最良と信じてきた民主主義は、実は破壊されてきたのである。おそらく三木卓や私の親世代、さらには戦後民主主義教育を受けて育った私の世代も含め多くの日本人はその点を見落としている。そして、そのことは日本の現代詩においても、これまでこの連載で引いた瀬沼孝彰などのマイナーな詩人が精確に捉えていたものの、それほど大きな共通意識にはなっていないように思う。よって北島の詩は、「平成」のはじまりからすでにその事実を照らし出していた、見落とされた「平成詩」といえよう。

今回はこの辺で終えるが、次回は「令和3年」の冒頭に載せる。三木卓の詩をはじめ「昭和」の戦後詩、さらには「明治」「大正」といったところまで戻って、「平成詩」の抱える問題を考えて行けたらと思う。

---

[1] 私が愛読するプラグマティズムの哲学者パースの考えに基づいている。

[2] 実はこの 3 年前に「地下鉄サリン事件」が起きている。おそらく北島たちは、当時の日本人以上に、このテロリズムが何を示しているのかを鋭く見つめていたに違いない。本論でもその点を思考していきたい。